

玉川学園 CC2000 でシステム管理業務の効率化を促進

IP-KVM スイッチと PDU のインターフェース集約でシステムを統合管理

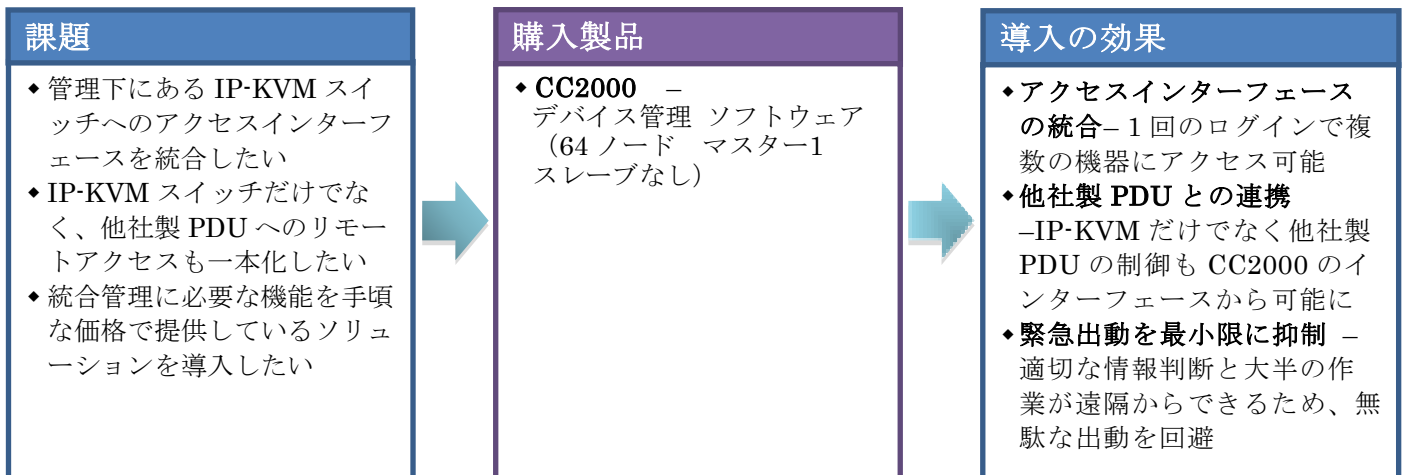
会社名：学校法人 玉川学園

玉川学園は、東京都町田市に広大なキャンパスを擁し、幼稚園から大学院まで一貫性の高い教育を実践している総合学園だ。



早くから最先端 IT による学内運営を実施している玉川学園では、授業で使用するシステムに加えて、生徒・教師・保護者が利用する学内グループウェアや、教師用のメールシステムや成績管理システムなど、常時稼働が求められるシステムが多数存在する。これらのシステムを少人数で効率的に管理するために、IP-KVM スイッチによるリモートアクセスの環境を整え、いつでも、どこからでも対応できる態勢を敷いているのは、前回の導入事例で紹介したとおりである。

今回の導入事例では、その続編として、同学園がシステム管理業務の環境をよりよくするために取り組んだ、新たな試みについて紹介する。



導入前の課題

PDU を含む IT 機器を高いコストパフォーマンスで統合管理できるソリューションを導入したい

玉川学園では、ATEN の IP-KVM スイッチ「KN1116v」を複数導入し、学内システム用のサーバーコンソールを集約した。サーバーの管理運用業務はネットワーク経由でこの KN1116v にアクセスしている。これらのサーバーの電源は他社製の PDU に接続しているが、PDU へのアクセスは、複数の PDU・UPS を統合管理できる同一メーカーのアプライアンスを利用しており、サーバーの電源制御もこの製品を介して行っていた。この機器は、自社製品しか統合できなかったため、サーバーのコンソールを操作したい場合には KN1116v に、電源を制御したい場合は PDU・UPS の統合管理アプライアンスにそれぞれアクセスし、運用していた。

このアプライアンスのリプレースのため後継品を調べたところ、機能も多様化・高度化していたが、その分、価格も値上がりしていた。主に業務で必要となるのはアクセスインターフェース集約の部分であるため、仮に予算があってもリプレースしたとしても、大半の機能を活用しきれないことは目に見えていた。現状のアプライアンスで統合管理の利便性を十分に享受している以上、今さら管理機器を一覧に記録して、都度確認しながらアクセスする方法は取りたくない。

同学園総務部で幼稚部から高等部までのシステム担当者である波里課長は、業務に必要な機能を十分に備えながらも、コストパフォーマンスに優れた統合管理ソリューションを探していた。

IP-KVM スイッチと PDU が統合管理できる CC2000 を採用。費用対効果の高さも魅力

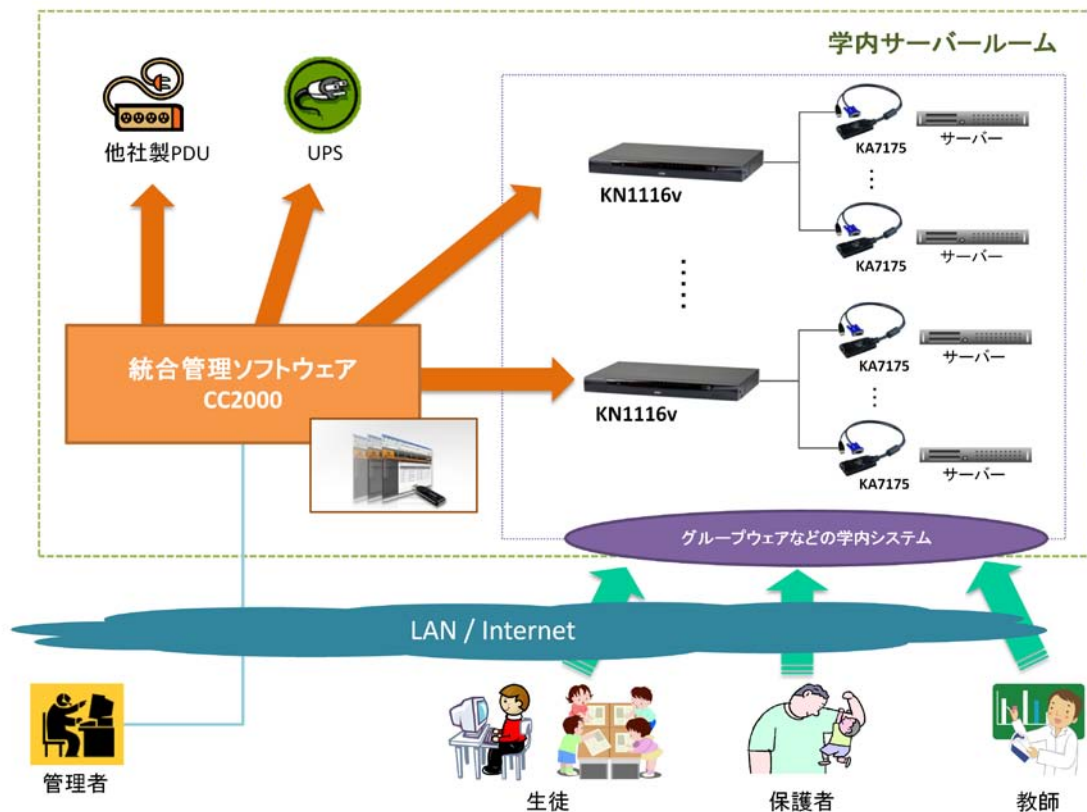


CC2000
デバイス管理ソフトウェア (64 ノード マスター1 スレーブなし)

IP-KVM スイッチのベンダーである ATEN の営業から統合管理ソフトウェア「CC2000」を紹介された波里氏は、アプライアンスの後継品としての活用の可能性を感じた。

この CC2000 は、各種 IT 機器に対して、シングルログインによって、シングルインターフェースでアクセスできるソフトウェアである。管理できるのは、ATEN の Over-IP 製品 (IP-KVM スイッチ、インテリジェント PDU、シリアルコンソールサーバー) のみならず、他社製の PDU や UPS、仮想サーバー、ブレードサーバー、また、プリンターやファイアウォールなどブラウザインターフェースの管理画面を持つ機器と多岐に及ぶ。

PDU ベンダーの統合管理ソリューションと比較して、機能は少ないながらも、自身が管理する環境に必要な機能を網羅しており、特に現在使用している ATEN の IP-KVM スイッチと他社製の PDU を、Web ブラウザの一面から管理できる点に魅力を感じた。価格も手頃だ。既存の環境に最適なソリューションだと感じた波里氏は CC2000 の導入を決めた。



操作ステップの減少と PDU との連携で遠隔からの管理業務が更に効率化。緊急出動も最低限に

波里氏のチームでは、ATEN の IP-KVM スイッチと他社製の PDU、そして UPS を CC2000 で統合管理。これらの機器のアクセスインターフェースを一箇所に集約したことで得られた最大のメリットは「業務の効率化・単純化」である。

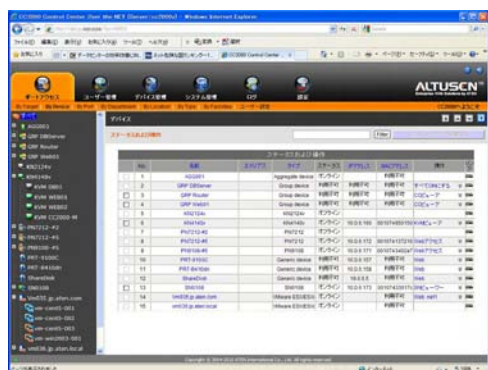
CC2000 にログインすれば、管理対象となる機器に再ログインする必要はない。操作ステップが大幅に減少し、作業も快適だ。

しかも、他社メーカーの PDU であっても CC2000 の配下に組み込むことで、CC2000 のインターフェースから電源の ON/OFF 制御ができ、業務の効率化に大きく貢献している。

システムで何か異常が発生した際には、まず CC2000 から IP-KVM スイッチ配下のサーバーコンソールの状況を確認し、電源を切る必要があれば、問題のアウトレットの電源を CC2000 から制御する。それでも、サーバーがうまく起動しない場合に、初めて現場に行って対応すればよい。IP-KVM スイッチと PDU が CC2000 上でスムーズに連携できるため、リモートからでもシステム全体を総合的に確認・制御できる。少人数で多岐にわたる業務を行っている波里氏のチームにとって、緊急出動の回数が減る効果は大きい。

感想・今後の展開

説明欄を活用して機器資産を管理。将来的にはアクセス権限の多様化も検討



CC2000 ブラウザメニュー (イメージ)

CC2000 のメインとなる統合管理機能を重宝しているのはもちろんのこと、小さい部分でも便利に感じている機能がある。

CC2000 上では、管理機器の識別に使う機器名だけでなく、その機器の参考情報を備考として登録することができる。波里氏のチームでは、この欄にサーバーの製造年度、シリアル番号、資産管理番号を入力している。特にサーバーは製造年度によっては故障が多いモデルもあるため、こういった情報を CC2000 の一覧で確認している。自由に入力できる備考欄は使い方も千差万別であるが、この使い方は、様々なシステムの運用管理に応用できる方法の一例であろう。

この CC2000 は、主に波里氏ともう一名の担当者が運用管理している。現在は、二人ともフルアクセスの権限で全体を掌握しているが、将来的に必要があれば、情報科担当の先生にもアカウントを発行して、簡単な作業を行ってもらう可能性があるという。その場合は、アクセス権限をユーザー別にコントロールして、セキュリティを保ちながらも操作に必要な環境を提供していきたい、と話している。